

## 遠藤周作とテレビ・ドラマ：脚本を手掛けた作品を中心に

池田，静香  
福岡共同公文書館

<https://doi.org/10.15017/1551324>

---

出版情報：九大日文．25，pp.102-112，2015-03-31．九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 遠藤周作とテレビ・ドラマ

—— 脚本を手掛けた作品を中心に ——

I K E D A S H I Z U K A  
池田 静香

はじめに

昭和49年7月から昭和53年2月にかけて講談社から刊行された遠藤周作文庫全集(全50巻別巻1)にはシナリオ集2冊があり、テレビ・ドラマ用に書き下ろした脚本3本が収録されている。

また、『遠藤周作シナリオ集』(講談社 昭46年11月)には、文庫全集同様、テレビ・ドラマ「平和屋さん」(NHK 昭33年)「ある戦中派」(NHK 昭38年)「わが顔を」(TBS 昭40年)が収められている。遠藤がテレビ放送と関わりが深かったことは、彼が昭和43年春にはトーク番組の司会を務め<sup>①</sup>、ぐうたらシリーズがベストセラーとなり狐狸庵ブームが到来するのと期を同じくした昭和48年には、ネスカフェ・ゴールドブレンドのCMに出演したりなどしたこと<sup>②</sup>から、広く知られたことだろう。だが、遠藤が脚本を手掛けたテレビ・ドラマの意義について論じられることは、これまでほとんどなかった。とはいえ、山根道公編「年譜・著作目録」(『遠藤周作文学全集15』新潮社 平12年7月)から列挙するだけでも、遠藤がテレビ・ドラマ脚本を手掛けたこと<sup>③</sup>に関して、芸術祭奨励賞を受賞した「平和屋さん」(NHK 昭33年)と「わが顔を」(TBS 昭40年)<sup>④</sup>の2件、遠藤作品が原作と

なったテレビ・ドラマについては「大変だア」(MBS 昭45年)の1件、彼がホスト役を務め、毎回ゲストを迎えた「こりやアカンワ」(NTV 昭43年)<sup>⑤</sup>、そして、信仰者としてハイヤット神父の宣教番組「心のともしび」に昭和39年から協力し、テレビラジオ双方に出演していたこと1件が、明記されている。また、現在、インターネット上で公開されているテレビドラマデータベース<sup>⑥</sup>には、遠藤が関わったテレビ・ドラマ情報40件が、登録されている。

平成26年4月17日、国立国会図書館は、日本放送作家協会が平成17年から収集を始め、その後、平成24年に設立された日本アーカイブズ推進コンソーシアムに同年引き継がれた後寄贈された、1980年以前のテレビ・ラジオ番組の脚本台本約2万7千冊の閲覧提供を始めた。報道発表資料には、「特に1980年以前の作品は、脚本だけではなく番組の映像・音声自体もほとんど残っていない」<sup>⑦</sup>とあるが、これは、1980年以前は特に、技術面からも経済面からも、番組の録画保存が難しかったことを指す。「1980年代以前の脚本をせめてなんとか遺産としてとどめよう」<sup>⑧</sup>という思いから始められた脚本の収集管理が、体系的に行われるようになったのは、平成15年、日本放送作家協会理事長であった市川森一が、衆議院総務委員会で提言を行ったことに端を発す<sup>⑨</sup>。極めて近年のことだ。また、仮に録画映像が残っていたとしても、ひとつの番組に付随する権利が多岐に亘り、クリアランスにあたっては複雑で煩瑣な手続きが要求されるため、番組を視聴することは容易ではない。

加えてテレビ・ドラマや映画舞台の脚本台本は、上映上演後に破棄されることも多かった<sup>(9)</sup>。そのため、紙媒体から辿ろうとしても、テレビ・ドラマの内容を詳細に知ることは、小説に比べ簡単ではない。そうしたなか、遠藤がテレビ・ドラマのために書き下ろした「平和屋さん」「ある戦中派」「わが顔を」、『遠藤周作シナリオ集』や『遠藤周作文庫 薔薇の館・女王戯曲・シナリオ集Ⅱ』（講談社文庫 昭52年3月）から、少なくとも物語内容を確認することができる<sup>(10)</sup>。

遠藤と映像メディア、なかでも映画との関係を考えるならば、大学卒業を控えた遠藤が映画俳優を志し、三船敏郎を真似て助監督から俳優に転身しようと松竹の助監督試験を受けたものの夢破れたこと<sup>(11)</sup>や、小説家となることを決心したフランス留学中（昭25年～昭28年）、映画の技法を自作の小説作法に取り込もうとしていたこと<sup>(12)</sup>が想起される。このように、映画という映像メディアと意識的に関わった遠藤が、戦後新しく出現してきたテレビという映像メディアと、どのように関わってきたのか<sup>(13)</sup>を考えることを小稿の眼目とする。その第一歩として、駆け出しであった頃の昭和30年代の遠藤が、テレビ・ドラマとどのように関わってきたのかに焦点を当て、その後の作品とどのような繋がりが見い出せるのかを検討する。

## 遠藤作品のテレビ・ドラマ化

遠藤作品がテレビ放送される場合、そこには二つの関わり方がある。それは、小説を原作としてテレビ・ドラマ化される場

合と、遠藤がテレビ・ドラマの脚本を書き下ろす場合である。

遠藤作品におけるテレビ・ドラマについて、小嶋洋輔が、「遠藤周作「中間小説」論——書き分けを行う作家」（千葉大学人文研究 第36号）において、先のテレビドラマデータベースをもとに調査を進め、遠藤原作のテレビ・ドラマ32本、遠藤脚本のテレビ・ドラマ4本の基礎情報を示してくれている<sup>(14)</sup>。

遠藤の本業が小説家であることを考えれば、脚本を手掛けたテレビ・ドラマより、原作者としてテレビ・ドラマと関わった数が多いことは当然のことのようにも思える。だが、小嶋の調査とテレビドラマデータベースの最新情報、そして年譜記述等から勘案すると、彼が脚本を手掛けていたのは、主に『沈黙』（新潮社 昭41年3月）の時期である<sup>(15)</sup>。これは、テレビ放送の歴史から言えば、日本社会にテレビ放送が誕生し、普及していく過渡期だ。テレビ・ドラマのひとつの形を作ったと言われる橋本忍脚本「私は貝になりたい」（現TBS 昭33年）が発表される昭和33年以前、テレビ・ドラマは、単発ものから連続ものへと移行するなかでテレビ的なるものを追求し、演劇や先行する映像メディアである映画との対比を通してその存在意義を見出そうとしていた<sup>(16)</sup>。そしてこの時期、テレビ・ドラマの作り手たちが目標としたのは、芸術賞で評価されることであった<sup>(17)</sup>。こうした風潮のなかで、遠藤が脚本を手掛けたテレビ・ドラマは、芸術祭奨励賞を受賞している<sup>(18)</sup>。

芸術祭とは、昭和21年秋、文部省（当時）が「広く一般に優れた芸術の鑑賞の機会を提供するとともに、芸術の創造とその

発展を図り、もって我が国芸術文化の振興に資することを目的として」創設した、芸術の祭典である<sup>(9)</sup>。現在、ライブを主とする公演に対しては「演劇、音楽、舞踊、大衆芸能」の4部門、放送メディアを媒介とする作品に関しては、「テレビ・ドラマ、テレビ・ドキュメンタリー、ラジオ、レコード」の4部門が設けられているが、本格的な運用が昭和28年に始まったテレビ放送において、テレビ・ドラマが芸術祭に参加したのは、昭和29年の第9回が最初であり、この時は主に放送技術を選考対象とした放送部門での参加だった<sup>(10)</sup>。しかし、それまで街頭で見えるものだったテレビが各家庭に普及していくなか<sup>(11)</sup>、昭和34年、芸術祭にテレビ・ドラマ部門が新設される<sup>(12)</sup>。産声を上げたばかりのテレビ・ドラマ界にとつて、芸術祭は、唯一の賞であった。そのため、制作者たちにとつては、芸術祭で受賞することが目標となっていたというのが、当時の風潮であったようだ<sup>(13)</sup>。芸術祭で評価される作品を作ることを至上命題とする初期テレビ・ドラマ界にとつて、その枠組みの典型と見なされたのが、昭和33年度第13回芸術祭賞を受賞した橋本忍脚本の「私は貝になりたい」(TBS 昭33年)である。未だ、日常と隣り合わせにあった戦争責任問題を、平均的な青年の姿を通して描いた作品が評価されたことで、テレビ・ドラマ制作者たちは社会的関心事を扱う作品へ情熱を向けたという。と同時に、芸術祭熱は、日々の放送業務を抱える現場において、年に一度の芸術祭にかける労力への疑問視や、社会派ドラマに拘るあまり視聴者の興味と乖離していく現状への疑問から長続きせず<sup>(14)</sup>。昭和35年を

境に、芸術祭参加作品自体が減少していくという指摘が、初期のテレビ・ドラマをめぐる状況をまとめた松山秀明「ドラマ論〈お茶の間をめぐる葛藤〉」(放送研究と調査「平成5年12月号」)にある。松山の指摘を否定するものではないが、昭和35年度以降の芸術祭参加作に、依然として社会派ドラマが数多く名を連ねているのも、事実である<sup>(15)</sup>。

### 脚本を手掛けたテレビ・ドラマ——小説との関係性を中心に

テレビ・ドラマ界の芸術祭熱に沿うように、昭和30年代から昭和40年にかけて遠藤が手掛けたテレビ・ドラマ脚本は、形を換えこそすれ、「戦争」を題材にしたものとなっている。

### ——「平和屋さん」

遠藤初のテレビ・ドラマ第14回芸術祭奨励賞受賞作「平和屋さん」(NHK 昭33年)は、第5回新潮社文学賞、第12回毎日出版文化賞を受賞した出世作『海と毒薬』(文藝春秋新社 昭33年4月、初出「文学界」昭32年6、8、10月号)の系譜をひく作品だ。『海と毒薬』が、町内のシヨウウィンドウに飾られた青い目の人形を起点として時間を切り換えるように、「平和屋さん」は、のどかな日曜の昼下がりにこだまするベットのあひるの鳴き声<sup>(16)</sup>を象徴的に使用することで、物語内の時空間が切り換わる。現在と過去を非対称の合わせ鏡とすることで、戦争協力が正義であった戦時下の姿と戦後の日常を対比させ、忘れることの出来た人々の無邪気さ、到底忘れることのできない息子を亡くした老婆や元陸軍大臣の娘の哀しみ、更には戦後になつて自我の芽生

える年齢を迎えた若者たちがためらいなく「戦争反対」を訴える姿を、批判的に描く。視点人物となる速見は、学徒兵としてフィリピンへ出征した経験を持ち、現在は紡績会社の課長代理として採用人事を担当している。先に述べた多角的な戦後の様相は、速見の会社へ、元陸軍大臣の娘西崎美地子が面接を受けに来た際、同僚たちが「成績は(略)一番いいんだが(略)戦争犯罪者の家族じゃ(略)仕方がない(略)これが戦争中なら」<sup>(27)</sup>と軽口をたたき不採用の結果を出したことを端緒とし、「戦争の思い出をかみしめるたびに、段々、今の時代の事がわかんなくなってくる」<sup>(28)</sup>と悩む速見が、「こういうキツカケから近頃の自分のもやもやした気持ちを整理してみたい」<sup>(29)</sup>と思いつち、美地子の就職や住まいの世話ができるよう尽力することを柱として展開する。その結果、戦争策略者を父に持った美地子の立場と、戦争で肉親を亡くした近所の人々という、双方の、どうにもならない現実が対峙されることとなり、一概には誰をも非難することの出来ない状況が、提示される。

速見の「もやもやした気持ち」は、時折こだまする戦病死した友の、「俺のように、女房にもお袋にも会えず、戦争で苦しみ死んだものは、(略)平和も何の慰めにも(略)償いにもならん」<sup>(30)</sup>という声から呼び起こされる。安易な戦争反対を詠う芝居を観劇した速見が「戦争なんてわかりにくい」<sup>(31)</sup>と吐露するのは、この「もやもやした気持ち」を晴らすために始めた美地子の家捜しや職探しが、かえって彼に「戦後」の難しさを突きつけたからだ。元陸軍大臣の娘や、戦争によって子供を亡くし

た老婆という位相の違う人物を描くことでなされる「戦争認識」の相対化が、本作のテーマだが、これは発表後、生体解剖事件に関わった「人々を裁断する意志は全くなかった」<sup>(32)</sup>と述懐した『海と毒薬』をはじめ、当時の遠藤の聖書読解を基とした「人間は誰一人として他人を裁いたり軽蔑したりする権利はない」という「聖書のなかの女性たち」(『婦人画報』昭33年4月号、昭34年5月号)における信念<sup>(33)</sup>に通じる。

だが、『海と毒薬』単行本化後のテレビ・ドラマ「平和屋さん」は、視点人物である主人公が、「みなさんと同じ」<sup>(34)</sup>一般的ななキャラクターとして設定されている点に、『海と毒薬』との端的な違いがある。『海と毒薬』は、その題材を、米軍捕虜の生体解剖実験という衝撃的な事件から採ったことにより、「自分が同じ状況におかれたら、どの程度、抵抗できたろうか」<sup>(35)</sup>という作者の疑問の根源が読者へ伝わり難く、関係者からの抗議文が遠藤宅に届くなどした。<sup>(36)</sup>「平和屋さん」の登場人物が、「みんなと同じ」で「平凡」な主人公、国防婦人会<sup>(37)</sup>や警防団<sup>(38)</sup>といった、戦時体制下において多くの人々が属した末端組織における戦争協力者として選ばれているのは、『海と毒薬』の時のような誤解を避けるためでもあつたらう。先に述べた「人間は誰一人として他人を裁いたり軽蔑したりする権利はない」という聖書理解が示された「聖書のなかの女性たち」は、『海と毒薬』単行本化の前月から1年2ヶ月に亘って連載された。「平和屋さん」が書かれたのは、その最中である。

次に、「ある戦中派」(NHK 昭38年)<sup>(39)</sup>だが、これは、後の戯曲「薔薇の館」(『文学界』昭44年10月号)や「女の一生二部——サチ子の場合」(『朝日新聞』昭56年7月3日、昭57年2月7日。以下、「女の一生二部」と記す)において取り組まれた、戦争参加の道義的責任を問うた内容である。だが、脚本家名が前面に出る戯曲や、遠藤周作ただ一人の名の許に発表される小説とは違い、テレビ・ドラマ「ある戦中派」は、キリスト教の「殺すなかれ」という教えと戦争参加の矛盾を特化して問いを形成しはしない。その代わり、学徒出陣<sup>(40)</sup>せねばならなくなった矢口が、同じ下宿に住む友人山崎に、「俺を大学にあげるために(略)苦勞した(略)お袋を悲しみますために俺たちを戦争にかり出す(略)国家とは一体何」なのか<sup>(41)</sup>と、「キリスト教」ではなく「母親」を疑問の基準に描き、問題設定がなされる。そしてこの「国家」を、「皮膚の色が同じ、顔形が同じ、そういう人間の集まりを国というわけ」なら「顔形や皮膚の色が同じだ」という事は、(略)そんなに大事な事なんかなあ<sup>(42)</sup>と、小説第一作「アデンまで」(『三田文学』昭29年11月号)以降拘りをみせてきた「色の問題」に描き、ストーリーを展開する。

同時期の短編「入営の日」(『オール読物』昭38年12月号)は、物語られる順序に違いはあれど、戯曲「薔薇の館」や「女の一生二部」のようにキリスト教の教えを前景化することなく、学徒出陣を迫られた青年の戦争参加に対する疑問やその後の決断が、「ある戦中派」とほぼ同じ表現、理由付けで作品化されている。そのため、創作意図に大きな違いはなかったと推察され

る。だが、これらを執筆した昭和38年が、遠藤が文学的回心を得る切っ掛けとなったといわれる、昭和35年4月から約二年七月月に及んだ結核再発に際する入院生活が終わり、徐々に『沈黙』(新潮社 昭41年3月)へと、意識が移っていく時期であることに留意した時、「ある戦中派」には、「入営の日」ではなされていない、特徴的な表現がある。それは、矢口の戦争への疑問を諫めながら聞いていた山崎が出征せねばならなくなった時、早智子に入営せずに行方をくまらず決意を打ち明ける場面だ。

卑怯者とは一体何だい(略)心で正しいと思つた事を、弱さのためにやれない事だろう。今度の場合、僕は国というものが一体、何の権利があつて母親から矢口を奪い、君、君たちから僕を奪うのか納得がいかないんだ……。みんなは入営する、陛下のため、日本のためという抽象的な理屈でね。しかし本当はこわいから入営するんだ。<sup>(43)</sup>(注、傍線は池田)

ここで言う「こわい」とは、入営を拒否して死刑になる噂だ。その後山崎は、短編「入営の日」や「女の一生二部」で、「俺が入営するのは国のためじゃない。みんながこうして苦しんでいるのに、俺だけがその苦しみを逃げるのはイヤだ」<sup>(44)</sup>と述べるのと同じ理屈で、出征を決意する<sup>(45)</sup>。また、「ある戦中派」の早智子は、先の引用にある山崎の告白を受けて、自分が山崎の入営を本格的に阻止しないのは、彼をかくまって警察から拷問をうけるのが怖いからだと思うようになるが、この早智子の拷問への恐怖と女性としての思いとの狭間にある苦悩は、名前の

響きを残し、同じく「女の一生二部」へと引き継がれる。

遠藤作品において、「心で正しいと思つた事を」、肉体的「弱さのためにやれない」人物の代表は、『沈黙』のキチジローだ。

昭和39年秋に訪れた長崎での踏絵体験が、やがて『沈黙』執筆の原動力となつた理由を、遠藤は、「戦争中(略)人間が肉体的な暴力によって自分の信念や思想をたやすく曲げていったケースを(略)目のあたりにした経験があり、「踏絵に足をかけていった人びとの話は」、キリスト教が敵性宗教であつた戦争時代に育つた自分にとつて「切実な問題だつた」<sup>(46)</sup>ためだと述懐し、「自分の問題をもつとも投影しやすいのは切支丹時代だと気づいたと続けている<sup>(47)</sup>。とすれば、「ある戦中派」は、『哀歌』(講談社 昭和40年10月)所収短編と同じく、『沈黙』のデッサンとしての役割を担つた作品の可能性はゼロではない。そうしたなか、「ある戦中派」には、『沈黙』への前奏曲であり、切支丹時代と戦時中の拷問を二重写しにして創られた短編「札の辻」(「新潮」昭和38年11月号)とは、些か異なつた表現が用いられている。それは、「心で正しいと思つた事を、弱さのためにやれない」ことを、「ある戦中派」のように「卑怯者」と呼ぶか、「札の辻」のネズミのように「臆病者」と呼ぶかの違いだ。キチジローの原型の一人で、外国人修道士ネズミが登場する短編「札の辻」は、「ある戦中派」と同年の執筆だが、ここでは「彼(注)ネズミ)がいかに気が弱く臆病であるか」<sup>(48)</sup>を示す戦時下でのエピソードが繰り返され、執拗に「臆病者」という形容をもつてネズミが造型される<sup>(49)</sup>。だが、「ある戦中派」では、「心で正し

いと思つた事を、弱さのためにやれない」者を、「卑怯者」という一言で断定する。

また転び者キチジローは、まず『哀歌』所収短編「雲仙」(「世界」昭和40年1月号)で描かれるものの、この時はその内面は外側からしか描かれず、『沈黙』ではその心情がはつきりと語られる。キチジローは、短編「雲仙」では、短編「札の辻」で「臆病者」と同じ意味合いで使用されている「怯えた」「弱さ」といった言葉で形容されているが<sup>(50)</sup>、『沈黙』では、「臆病」「卑怯者」「弱虫」と、ニュアンスの違う言葉を絡み合わせて造型されている<sup>(51)</sup>。更には、『沈黙』では、ロドリゴを役人に売つて以降のキチジローに対して「卑怯」という表現は用いられず、捕らわれて後棄教するまでのロドリゴに対して、「卑怯者」という言葉が用いられている<sup>(52)</sup>。とすれば、『沈黙』における棄教や、遠藤の棄教に対する意識の変化意味を考へる上で、「ある戦中派」における先の引用箇所は、ひとつの指標となるだろう。

なお、「女の一生」で「卑怯」と表現されるのは、戦時中のキリスト教会であり<sup>(53)</sup>、遠藤の切支丹研究の集大成である「日本の沼の中で」(「野性時代」昭和54年1月号〜6月号)で、転び者は「卑怯な自分(注、棄教者)、裏切りの自分、弱い自分、二重生活者の自分」と説明されている<sup>(54)</sup>。

#### ——「わが顔を」

「わが顔を」(TBS 昭和40年)は、人間の心の奥にある「無意識」を問題にした作品である。「わが顔を」以前の作品で「無意識」を扱つた短編「松葉杖の男」(「文学界」昭和33年10月号)に、

戦争中、中国の小さな部落で、捕虜の手足を縛って身動きをとれなくし、母親の前で殺した体験が無意識に潜んでいることが原因で、両足が硬直してしまつた男の話がある。<sup>(56)</sup>「わが顔を」にも「戦争中(略)上官の命令で捕虜をしやがませたまま背後から射殺して」<sup>(57)</sup>突然、「跛」になつた患者の話がある。「わが顔を」発表の一年ほど前には、「海の沈黙」(週刊新潮)昭38年12月2日(昭39年5月4日号、後に『闇の呼ぶ声』と改題し、昭41年12月に光文社から刊行)で、ある人物の理解し難い行為に直面した時、周囲がその人物の「無意識」を探ろうとすることをストーリー展開の軸とした心理サスペンスを執筆している。それと同じく「わが顔を」も、結核を患い、三年に亘る病床生活を送る妻フミ子が、遺書もなく自殺した本当の理由を、夫謙三が知りたいと願うことを軸に、展開されていく。だが、短編「松葉杖の男」やサスペンス「海の沈黙」といつた昭和30年代の「無意識」を扱つた作品と違うのは、このテレビ・ドラマでは、謎の自殺をした妻の本当の気持ちだけでなく、作品の視点人物自身の「無意識」までも、知りたいと考える点である。

妻の看病に専念してきた謙三は、夜、眠れないという彼女に睡眠薬を渡す。いつもなら服用する分だけを置いて出るのに、瓶ごと忘れてきてしまつたある日、妻は薬を過剰摂取して自殺する。友人は、自殺したのは「病苦を悲歎されて」だとか、「発作的に」と言つてくれるが、謙三は「本当は心の底でどう思つて死んだんだろう」と、その理由を探りたいと願ひ、妻の親友京子のもとを訪れる。彼女から、恨んでいたわけではない

にせよ、母体のためとはいえ、ようやく出来たお腹の子を、相談もなく墮ろしてしまつたことが、病床のこれからの生き甲斐になつたかもしれないものを失つたと泣いたことを聞く。<sup>(60)</sup>生前から、妻のそうした気持ちに薄々気づいていた謙三は、自分が何故、睡眠薬の瓶を忘れてきてしまつたのかが気がかりで、友人の心療科医斎藤のもとを訪れ、自分の行為の「真実」を知りたいと打ち明ける。その結果、「生きているのが肉体的にも精神的にも(略)辛い」<sup>(61)</sup>妻と、「妻の苦しんでいる姿を見るのが耐えられない」自分、双方の「苦しみからの解放」<sup>(62)</sup>という無意識下の感情が明らかとなる。それを受け、そもそもこの診察に乗り気でなかつた友人の心療科医が「そこまで突きつめれば、出口がないじゃないか。俺たちのこの心の(略)奥は」<sup>(63)</sup>と再び口にするところで、物語は閉じられる。

前述した「海の沈黙」の流れを汲み、サスペンス小説における謎解きのモチーフとして「無意識」概念を取り入れた作品には、『真昼の悪魔』(新潮社、昭55年12月、初出は『週刊新潮』昭55年2月21日号(7月31日号)、『悪霊の午後』(講談社、昭58年4月、初出は『燭台』(山陽新聞)他、昭56年10月9日(昭57年5月8日)、『妖女のごとく』(講談社、昭62年12月、初出は「妖女の時代」(小説現代)昭60年2月号(昭62年1月号号までの隔月)、『わが恋う人は』(講談社、昭62年2月、初出は「京都新聞」他、昭60年11月1日(昭61年7月8日)などがある。年譜に、『スキヤンダル』(新潮社、昭61年3月)のテーマとなつた「深層心理と悪の問題に関心が向かう」とあるのは昭和56年の項だ。<sup>(64)</sup>とすれば、これらのサスペンス小説を書いていた頃と



考えてよい。だが、遠藤作品のなかで、「わが顔を」と同じく、視点人物自身の無意識を探る物語が描かれる作品はこれらのなかに含まれず、『スキヤンダル』を俟たねばならない。むしろ「わが顔を」執筆段階では、まだユング心理学と出会っていないため、「無意識」が有するという「創造性」に思い至るはずもなく、謙三自身の「無意識」がわかったところで、「出口がないじゃないか」と、むなしさだけが残される。<sup>(65)</sup>

また、『スキヤンダル』の中心的な「謎（無意識）」は、「醜悪や無に堕ちて死ぬ」悦びだ。<sup>(66)</sup>そしてこのことを、「無意識」の代表である成瀬夫人が、人間の本能として認識するようになったのは、夫から聞かされた戦時下における中国大陸での婦女子虐殺である。<sup>(67)</sup>「わが顔を」の「謎」は、妻の自殺とそれを幫助したのかもしれないと思う夫の「死」にまつわる深層心理である。このことを「醜悪」とは考えないが、謙三が妻のお腹の子を堕ろすかどうかの判断にまつわる参照点として、戦闘状況においては、敵兵を殺さねば自ら、もしくは部下を死なせてしまうことが挙げられていることを考えれば、視点人物の「心の奥底」に潜む「死」にまつわる「無意識」を探究した「わが顔を」は、約20年後の『スキヤンダル』に繋がる、重要な作品であろう。

## おわりに

小稿は、遠藤が脚本を手掛けた昭和30年代のテレビ・ドラマ作品を採り上げ、その特徴を確認してきた。その結果、「平和

屋さん」(NHK 昭33年)は、『海と毒薬』(文藝春秋新社 昭33年4月、初出「文学界」昭32年6、8、10号)の補足的な作品、「ある戦中派」(NHK 昭38年)は『沈黙』(新潮社 昭41年3月)のデッサン、「わが顔を」(TBS 昭40年)は『スキヤンダル』(新潮社 昭61年3月)へ至る試み、といった位置づけになるのではないか。

また、テレビ・ドラマ脚本が執筆されたのは、日本人でありながらカトリックを柱とした問題意識を持つ遠藤が、「妥協もヘツククレもあるか。好き勝手なことを書いてやれ」<sup>(68)</sup>と、思えるようになる『沈黙』執筆以前の、苦しい試行錯誤を重ねた時期である。そこには、日本人には縁遠い問題をテーマとした自分の文学を、どうしたらよりわかってもらえるのかという悩みがあった。戦後、産声を上げた日本のテレビ・ドラマは、昭和28年から昭和40年頃までの間に、そのあり方を単発ドラマから連続ドラマへと緩やかに移行しながら、その過程を通して「お茶の間」という時間と空間を「発見」していた<sup>(70)</sup>。この、お茶の間の娯楽となるべく、いい意味での「大衆性」に重きをおいてテレビ・ドラマがその進むべき道を見出ししていくのが、昭和30年代のことでもあったことに、ひとつのヒントがあるように思う。遠藤がそれを意識していたか否かは定かでないにせよ、『沈黙』以前に手掛けたテレビ・ドラマ脚本は、平凡な日常を描くことの延長線上に神の問題を問う、遠藤文学のスタイルを築き上げるための、重要なレッスンであったのではないか。

【注記】

- 1 山根道公編「年譜・著作目録」(『遠藤周作文学全集15』新潮社 平12年7月) 355頁参照。
- 2 山根道公編「年譜・著作目録」注1に同じ、362頁参照。
- 3 「わが顔を」(TBS 昭40年)について、遠藤とディレクターとのやりとりについて書かれた記事に「出番を削られた遠藤周作先生」(『週刊現代』昭41年11月3日号)がある。
- 4 「今年大活躍したTVタレント番付」(『週刊現代』昭43年11月21日号)は、「こりゃアカンワ」における遠藤のインタビュアー技術を讃え、「貴重なたレント遠藤氏」の小見出しをつけた。
- 5 テレビドラマデータベース <http://www.tvdrama-db.com/> (平27年2月確認)
- 6 国立国会図書館 報道発表資料 平26年3月25日付
- 7 山田太一「『こ挨拶』なぜ、この会をつくったのか」(一般社団法人日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムHP) <http://www.nkac.jp/>
- 8 石橋映理「映像の現存率が低いなか放送文化を残していくために」(『アーカイブ立国宣言』ポット出版 平26年11月) 98頁
- 9 石橋映理「映像の現存率が低いなか放送文化を残していくために」注8に同じ、99頁
- 10 現在、国立国会図書館で閲覧できる遠藤脚本のテレビ・ドラマは「平和屋さん」「わが顔を」「もう一人の不竜獅子虎」あるキリシタン大名の生涯(『NHK 昭53年』)である。(平27年2月)
- 11 「夢よもう一度——どんなツマらぬ脚本も——」(『映画芸術』昭42年4月号) 24頁参照。
- 12 昭26年1月1日付日記、『作家の日記』作品社 昭55年9月、『遠藤周作文学全集15』新潮社 平12年7月63頁参照。
- 13 なお、遠藤は「わが家の自慢——テレビ第一号」(『別冊文藝春秋』昭32年12月号)で、「ぼくの家には今、萬金を出しても買えない超特大二十四インチのテレビがある。これはテレビが米国にはじめて出来た(略)第一号級のもの」(91頁)などとうそぶく。事の真偽は措くとしても、新しいメディアであったテレビに興味津々であったことは覗える。
- 14 小嶋洋輔「遠藤周作「中間小説」論——書き分けを行う作家」(『千葉大学人文研究』第36号・平19年) 38頁参照。確定された遠藤脚本のテレビ・ドラマは、「平和屋さん」「ある戦中派」「わが顔を」の他、永井荷風『新帰朝者日記』(初出は『帰朝者の日記』(『中央公論』明42年10月号)のバロディ「新帰朝者」(MBS 昭43年) (50頁)51頁)。
- 15 現在テレビドラマデータベースには、遠藤脚本のテレビ・ドラマ「もう一人の不竜獅子虎」あるキリシタン大名の生涯(注10に同じ)が加えられている(平27年2月)。
- 16 鳥山弘『日本テレビドラマ史』映人社 昭61年9月 47頁49頁
- 17 文化庁文化部芸術課編『芸術祭30年史本文編』文化庁 昭51年12月 185頁
- 18 「平和屋さん」は、昭和34年度第14回芸術祭奨励賞を受賞。昭和34年11月20日20時30分〜21時45分NHKで放送された。「わが顔を」は、昭和41年度第21回芸術祭奨励賞を受賞。昭和41年11月27日21時30分〜22時30分TBSで放送。昭和44年度第24回芸術祭参加作品「ドラマ・てれびじょん'69」(早坂晁脚本 毎日放送)に、遠藤は出演者として名を連ねる。(文化庁文化部芸術課『芸術祭30年史資料編(上)』文化庁 昭51年3月 309頁、同(下)『文化庁 昭51年3月 264頁、270頁参照])
- 19 文化庁「芸術祭にこころ」[http://www.bunka.go.jp/geijutsu\\_bunka/01geijutsusai/](http://www.bunka.go.jp/geijutsu_bunka/01geijutsusai/)

- 20 文化庁文化部芸術課編『芸術祭30年史本文編』注17に同じ、26く27頁  
鳥山弘によれば「昭和31年、テレビ普及台数は四十万台を超えた」とある（『日本テレビドラマ史』注16に同じ、57頁）。佐怒賀三夫によれば「受信機の普及で受信者が一気に上昇する56年（注、昭和31年）ごろ（略）同じ集団視聴でも（略）街頭から喫茶店、さらに特定個人家庭での共同視聴へとすすみ」とある（『テレビドラマ史——人と映像』日本放送出版協会、昭53年9月22頁）。
- 22 文化庁文化部芸術課『芸術祭30年史資料編（上）』注18に同じ、309頁
- 23 文化庁文化部芸術課『芸術祭30年史本文編』注17に同じ、185頁
- 24 文化庁文化部芸術課『芸術祭30年史本文編』注17に同じ、185く186頁
- 25 文化庁文化部芸術課『芸術祭30年史資料編（上）』『同（下）』注18に同じ、参照。昭和41年度第21回芸術祭参加作品について、「ドラマの部門では、社会悪や交通災害、原爆症の問題を扱ったものが多かった」（文化庁文化部芸術課『芸術祭30年史本文編』注17に同じ、191頁）とある。
- 26 「平和屋さん」（NHK 昭33年）、『遠藤周作文庫 薔薇の館・女王 戯曲・シナリオ集Ⅱ』講談社文庫 昭52年3月 188、191、230頁参照。
- 27 「平和屋さん」注26に同じ、194く195頁
- 28 「平和屋さん」注26に同じ、225頁
- 29 「平和屋さん」注26に同じ、201頁
- 30 「平和屋さん」注26に同じ、203頁。なお、戦死した者のこうした呻き声は、初の長編小説「青い小さな葡萄」（『文学界』昭31年1月号く6月号）で、迫害された者たちの眠る土地の声として描かれる。
- 31 「平和屋さん」注26に同じ、191頁
- 32 「出世作の頃」（『読売新聞夕刊』昭43年2月5日く13日）『遠藤周作文学全集12』新潮社 平12年4月 414頁
- 33 「聖書のなかの女性たち」（『婦人画報』昭33年4月く昭34年5月号）、引用は『遠藤周作文庫 聖書のなかの女性たち』講談社文庫 昭50年11月89頁に拠った。
- 34 「平和屋さん」注26に同じ、187頁
- 35 遠藤周作×熊井啓「あなたなら、どうしますか」（『あけぼの』初出誌未確認）、引用は、『対話の達人、遠藤周作Ⅰ』女子パウロ会 平18年10月330頁に拠った。
- 36 「出世作の頃」注32に同じ、414頁
- 37 「平和屋さん」注26に同じ、121頁
- 38 「平和屋さん」注26に同じ、221頁
- 39 「ある戦中派」は、昭和38年12月8日22時30分く23時30分NHKで放送された。
- 40 理工学系以外の学生に対する徴兵猶予制度が撤廃されたのは昭和18年9月のことで、遠藤はその年の4月に、慶應義塾大学文学部予科に入学している。
- 41 「ある戦中派」（NHK 昭38年）、引用は『遠藤周作文庫 薔薇の館・女王 戯曲・シナリオ集Ⅱ』注26に同じ、243頁に拠った。
- 42 「ある戦中派」注41に同じ、243頁
- 43 「ある戦中派」注41に同じ、256頁
- 44 引用は「入営の日」（『オール読物』昭48年12月号）、引用は『ぼくたちの洋行』講談社 昭50年5月 26頁に拠った。
- 45 「女の一生三部——サチ子の場合」（『朝日新聞』昭56年7月3日く昭57年2月7日）、『女の一生三部——サチ子の場合』朝日新聞社 昭57年3月

375頁参照。

- 46 「沈黙の声」『沈黙の声』プレジデント社 平4年7月 16〜17頁
- 47 「沈黙の声」注46に同じ、95頁
- 48 「札の辻」(「新潮」昭38年11月号)、引用は『遠藤周作文学全集7』新潮社 平11年11月172頁に拠った。
- 49 「札の辻」注48に同じ、170、177、178頁。「弱さ」という言葉でネズミを説明している箇所は170、176、179頁。
- 50 「雲仙」(「世界」昭40年1月号)、『遠藤周作文学全集7』注48に同じ、222〜223頁を参照。なお、「卑怯」という言葉は、キチジローの心を掴もうとする主人公で作家の能勢に対して使われている(218頁)。
- 51 『沈黙』新潮社 昭41年3月、『遠藤周作文学全集2』新潮社 平11年6月194、196〜197、200〜202、208、213〜214、221〜222、229、240、242、259、269、270〜271、301頁参照。
- 52 『沈黙』注51に同じ、285〜286頁参照。なお、絵踏み後は、「弱さ」の形容が使われる(315頁)。
- 53 「女の一生二部——サチ子の場合」注45に同じ、238、256、279頁参照。キリスト教会の態度を「ぼく等と同じように、弱く、だらしなく、臆病」(303頁)とも記す。
- 54 「日本の沼の中で」(「野性時代」昭54年1月号〜6月号)、引用は『切支丹時代——殉教と棄教の歴史』小学館ライブラリー 平4年2月 204頁
- 55 芸術祭での評価は「新しいテレビ技術を駆使して、人間心理の世界に肉迫しようとした試みとして、高く評価したい。但し演出が技術を消化しきれていない部分がある。これはテレビの明日の課題であろう」というもの(文化庁文化庁芸術課『芸術祭30年史資料編(下)』注18に同じ、391頁)。
- 56 「松葉杖の男」(「文学界」昭33年10月号)、『遠藤周作文学全集6』新潮社 平11年10月 262、273頁参照。
- 57 「わが顔を」(TBS 昭40年)、引用は『遠藤周作文庫 薔薇の館・女工戯曲・シナリオ集II』注26に同じ、277頁に拠った。
- 58 「わが顔を」注57に同じ、279頁
- 59 「わが顔を」注57に同じ、279頁
- 60 「わが顔を」注57に同じ、300〜301頁
- 61 「わが顔を」注57に同じ、308頁
- 62 「わが顔を」注57に同じ、309頁
- 63 「わが顔を」注57に同じ、309頁
- 64 山根道六編「年譜・著作目録」注1に同じ、373頁参照。
- 65 「わが顔を」注57に同じ、309頁。とはいえ、『スキヤンダル』(新潮社 昭61年3月)の「無意識」が、明るいものとして描かれるわけでもない。
- 66 『スキヤンダル』注65に同じ、『遠藤周作文学全集4』新潮社 平11年8月 87〜89頁参照。
- 67 『スキヤンダル』注66に同じ、90頁参照。
- 68 「わが顔を」注57に同じ、302〜303頁
- 69 「沈黙の声」注46に同じ、79頁
- 70 松山秀明「ドラマ論〜お茶の間をめぐる葛藤〜」(放送研究と課題) 平25年12月号) 54頁

(福岡共同公文書館)